

コロナ禍において導入された機器を今後どう使用していくか？

◎佐々木 大介¹⁾

長崎大学病院¹⁾

新型コロナウイルス（SARS-CoV-2）は2019年に中国湖北省武漢周辺で初めて確認され、その後世界的パンデミックを引き起こしたウイルスである。日本では2020年1月に初めて武漢渡航歴のない患者が報告されたが、発生当初は SARS-CoV-2 の感染の有無を調べるには PCR などの核酸増幅法しかなく、PCR 検査を実施できる検査技師が少なかったことや、PCR 検査機器を所有する医療施設が少なかったことより全国的に必要とされる検査のキャパシティーは非常に不足していた。そのため日本政府は PCR などの検査体制のさらなる強化を目指しリアルタイム PCR 機器などの購入の補助を行った結果、医療機関ではリアルタイム PCR 装置や自動 PCR 検査機器などが多数導入された。

しかし SARS-CoV-2 検査が必要とされなくなった際にはこれら導入された機器をどのように維持・管理もしくは使用していくかを考える必要があると思われる。

我々の施設では導入の際、SARS-CoV-2 遺伝子検査のみに使用するような機器（特に自動 PCR 検査機器）などの導入を避け、検査が必要とされなくなった際にも活用できる機器を購入しようと考え、汎用性のあるリアルタイム PCR 装置や自動核酸抽出機、自動液体分注装置などを購入した。これらの機器は検査に使用するだけでなく、さまざま実験などにも広く使用できる。

本講演では当施設における活用例もしくは活用構想を紹介したい。